

## 銀座遊歩

銀座とは北は旧京橋川の現東京高速道路の西銀座ジャンクションから京橋ジャンクション、南を旧汐留川の東京高速道路土橋入口から汐留ジャンクション、東は首都高速環状線、西は東京高速道路の外堀通りの土橋入口から西銀座ジャンクションまでの地域を指します。江戸の町づくりは京都や大阪と違い、東西南北の方向に整備されずに江戸城を中心に内堀通り、外堀通りがあって、その周辺がややいびつに格子状になっているので、方角がややもすれば、正確ではありませんので、地図を参考にしてください。



(西銀座の高速道路と晴海通りの交差点付近)



(外堀通り、別名電通通り、左は高速土橋入口)

徳川家康(1542年[天文11年]~1616年[元和3年])2回目の天下普請(1612年)によって前島があった東京駅から東側にある小高くなった畷伝いに後藤庄三郎を中心として東海道に繋がる中央通りの区割りを京橋側から汐留の方に、1丁目から順に整備していきました。

一町(丁)とは6尺(1尺 $\approx$ 30.303cm)を1間とし、60間を一丁(約109.09m)とした事から来ています。

一そして銀座(中央区本石町)に両替町があったことから、1丁目から4丁目までを新両替町として幕府は商人に拝領し、二丁目付近に、当初は堀の銀吹屋、湯浅作兵衛(後に大黒作兵衛<sup>じょうぜ</sup>常是を家康により拝名)を呼び寄せ<sup>じょうぜ</sup>常是役所を設け、銀貨の鑄造及び検査を担当させ、品質の証明としての極印の打刻と小玉銀の包封を行わ



(銀座4丁目交差点、和光)

せ、この包みを常是包みとして両替屋の包みと区別をしました。

また徳川家康の在所である駿府から銀座役所を移転し、その銀座役所は銀の買い取りや、幕府への運上(租税の一種、金銭で行う事を運上金と言った)等を請負ったり、天領から送られて来る灰吹銀を丁銀に铸造する幕府御用達としての銀貨の铸造を主としていた。

そもそも日本で本格的に銀が出回り始めるのは、1526年(大永6年)大田市(旧、佐摩)の石見<sup>いわみ</sup>銀山の発見からである。博多の商人、神谷寿貞が周防の領主、大内義興らの支援を得て銀峰山の中腹の地下から銀を掘り出したと伝えられる。

しかし中国の銀の精錬技術である灰吹法が日本にもたらされ、その製錬に成功したのは1533年(天文2年)である。そして実際に大々的に掘削され始めたのは16世紀半ばであった。その技術は瞬く間に日本全国に広まり、日本の銀の採掘量がやがて慶長～寛永年間には、当時スペイン領であった南米ボリビアのセロ・リコと並び称され、世界の3分の1になるまでに多くなって行った。

これを加工した丁銀は通貨としての価値を持ち始め、商業の発展時期と重なって、経済的効果に貢献することとなり、また当時国際通貨として流通していた銀貨はポルトガルや、オランダも巻き込みアジア圏の貿易にも貢献していった。そして豊臣秀吉が行った朝鮮出兵(1593年<文禄2年>)、1597年<慶長2年>の文禄、慶長の役)の財源もここから賄われたと言われている。

それまでは日本に出回っている銅に金、銀が多量に含まれていた為、中国などはこの安い銅から金や銀を抽出して多大な利益を得ていた。しかし1591年(文禄2



(銀座役所があった場所に立つ銀座ティファニー)。



(銀座ティファニーの前にある石碑)。

年)曾我理右衛門が泉州、堺で南蛮吹きと言う日本で流通していた希少金属を多量に含む粗銅から金と銀を分離する技術を南蛮人から伝授され、国内に流通している銅が堺に集まるようになってからは日本から銅の流出が収まった。